

教えてください、あなたのこと ②②

東京都清瀬市 坂巻 真砂子さん（清瀬ごみともだち）



今、お茶わんの
リユース・リサイクル
をやっています。



Q 差し支えなければ、年齢、出身地を教えてください。

A 1950年（朝鮮戦争の年）、埼玉県与野（現さいたま市）に生まれました。子どもの頃、我が家では裏庭に掘った大きな穴にごみを埋め、紙類はお風呂の焚付けに使っていました。

Q ごみ問題に関心を持つようになったのは…？

A 1986年に清瀬市の公団住宅に入居して、まず驚いたのが、可燃ごみが毎日収集されていることでした。住民は小さなレジ袋にごみを入れて毎日出すのが当たり前。家の中にごみをストックする習慣がないように見えました。住民のごみ出しマナーが気になり「ごみは文明の尺度、民度の問題だ！」と思いつめるほどでした。

3人の子どもを育てながらごみのことを勉強し始め、ごみの中身が昔とちがって多種多様になっており、燃やしたり埋めたりしても自然に還らないものが増えていることに気づかされました。そこで、当時の生活クラブ生協清瀬支部の中で「みに・ごみ新聞」を発行したり、町の印刷屋さんの協力を得て、「ごみのダイエット / 6つの方法」というリーフレットを青年会議所と協同で発行したりしました。

Q 「ごみ・環境ビジョン21」に入会してくださったきっかけを教えてください。

A 1994年、多摩地域のごみの最終処分場を描いた映画「水からの速達」の市内上映会を開き、これをきっかけに「清瀬ごみともだち」が誕生しました。ごみに関心を持つ市民が集まり、自由に、とにかくごみのことだけに集中して動くというスタイルは、とても魅力的なものでした。そこに「ごみかん」事務局の現副理事長の佐藤さんが参加され、ごみともだちもごく自然にごみかんの団体会員になりました。

Q ごみ問題に関すること以外に、趣味や生きがいは何ですか？

A 本業のアニメーションの現場から離れて久しく、絵入り・手書きのチラシを書くことが趣味みたいなものです。

また、戦争の影響が多く残る時代に育ち、「親の世代はなぜ戦争を止められなかったのか？」を考え続けてきました。それが今や私たちが孫にそう問われる状況になってしまっています。やっぱりおかしいことはおかしいと、声に出し続けたいと思っています。

Q 特筆すべき近況があれば、教えてください。

A 数年前から会社勤めを始め、日々時間に追われる暮らしで自由になる時間が極端に少なくなっています。人々の暮らしにゆとりがなくなると、市民運動も厳しくなるのでは…と気がかりです。

Q ごみかんに期待したいこと、あるいは提案したいことをお聞かせください。

A 企業と行政を巻き込んだごみかんの活動には、教えられることがたくさんあります。多摩エネ協の次世代育成プロジェクトのような、次世代を育てる企画を期待します。